

平成21年 5月13日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18500593

研究課題名（和文） 幼児の仲間入り行動におけるコミュニケーション

研究課題名（英文） Communication skill of preschooler in entering a play group

研究代表者

倉持 清美 (KURAMOCHI KIYOMI)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：30313282

研究成果の概要：

日本各地の仲間入り表現を調査した結果、様々な表現があるがイントネーションなど類似した側面があることが分かった。全国の保育者に仲間入りについて調査した結果、仲間入り表現を教えると回答した保育者は保育士に多かった。これらの結果については、学会で発表し、現在論文としてまとめている。中国・韓国には仲間入りの際に決まり切った表現がないことが分かった。中国・韓国の保育者の保育観を聞き取り調査やアンケート調査によって明らかにした。これらの結果については、学会誌で発表した。現在も、収集したデータについては分析し、論文にまとめている。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	0	1,500,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	570,000	3,970,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：幼児、仲間入り、コミュニケーション、中国、韓国、保育

1. 研究開始当初の背景

仲間入り行動に関する研究は、欧米を中心に1930年代から新たな相互交渉を開始するために重要な行動と考えられ研究が進められてきた。1980年代になると、仲間入りの方略と社会的能力と関連づけて検討されるようになった。欧米では、仲間に入るということがそもそも難しい課題であること、仲間に入る際には、ホスト集団の周りをうろろうして何をして遊んでいるのか確認した後、その遊びに適合した声かけや動作をするという一連の

方略が仲間に入りやすく、社会的能力の高い子どもが使用する方略であったことが明らかになった。

日本では、本研究の代表者である倉持が、仲間入りの研究を行っている。幼稚園をフィールドとした長期の観察研究から、仲間入りの際には「入れて」という決まり切った表現を使う場合が仲間に入りやすいこと、「入れて」と言わないで仲間入りする場合は「入れて」ということを求められることを明らかにした(1991, 1998)。また、幼稚園のクラス集団が

関わりの歴史を持つに従って、仲間に対する認識（「遊びたい子」であるかどうか）によって、仲間入りの正否が決定する側面が強くなる。つまり、仲間に対する認識が深まるにつれて、仲間入りの際にどのような方略を採るかは仲間入りの正否に影響を与えなくなっていた（1999）。

仲間入りは、一緒に遊び始めるための最初の手続きであり、仲間入り後も交渉を続けることで遊びが継続されていく。そこで、仲間入り後にどのようなやりとりが行われているかを、実験場面を設定して検討した。その結果、仲間入り側は、仲間入りが成立した後に、情報収集に関するコミュニケーションを、仲間入り側とホスト側で展開していることがわかった。こうしたコミュニケーションを経て、仲間入り側が徐々にホスト集団の一員となっていくという過程を明らかにすることができた（1994）。

このような研究から、日本の幼稚園などの就学前施設の仲間入り場面では「入れて」という決まり切った言い方を使うこと、その言い方が仲間入りをしやすくしているが、関わりの歴史を持つようになると仲間に対する認識も重要な要因になってくること、遊び集団に統合されていくためのコミュニケーションは仲間入り後に行われていることを明らかにすることができた。

これらの研究によって、日本の就学前の子どもの仲間入り行動の実態を明らかにすることができたと考える。しかし、「入れて」という言い方の各地域によるヴァリエーションや、「入れて」という言い方を教える保育者側の意図、「入れて」という言い方がもたらす社会的相互交渉の特徴については、十分に研究されていない。また、日本の近隣にある中国・韓国の仲間入り行動についての研究はほとんどない。歴史的にも文化的にも多くの接点を持つ中国・韓国の仲間入り行動を検討することで、日本の仲間入り行動の特徴を明らかにすることができる。

2. 研究の目的

(1) 仲間入り研究は、就学前の子ども達が相互交渉を始めるきっかけの一つとして、研究されてきた。欧米の研究では、社会的能力によって、仲間入りの方略が異なることが実証されている。しかし、欧米の仲間入り行動は、日本のように「入れて」という決まり切った言い方を使わない。「入れて」という言い方は、主に関東地方で使われる仲間入りの言い方である。そこで、まず日本各地域で、仲間入りの際にどのような決まり切った言い方を持つのかを調査し、明らかにする。

(2) 日本では、仲間入りの際に「入れて」というように、保育者から指導されている。欧米では、直接的な仲間入りの意志を示す方略

は採らない。こうした直接的な言い方を指導する意図を保育者を調査することによって、明らかにしたい。

(3) 「入れて」という直接的な言い方は、仲間入りするという事実を明確化してしまい、仲間入りされる側であるホスト集団に諾否ゆだねる行為である。日本と文化的にも歴史的にも多くの接点を持つ中国・韓国では、このようないい方をしない。日本の仲間入り場面におけるコミュニケーションスタイルの特徴を明白にするために、中国・韓国の仲間入り行動を調査する。

3. 研究の方法

(1) 各地域の就学前施設の保育者に仲間入り表現と仲間入りに対する考え方を調査する。

仲間入りの表現、仲間入りに対する考え方、仲間入りに対する介入の仕方などを日本各地域の保育者に調査を行う。郡部・都市部に偏りがないように配布する。年齢別クラスの担任保育者を対象とする。回収した調査票から、代表的なものを抽出し、保育者の許可を得て、保育者に対して面接調査を実施する。これらの結果をまとめて、保育者の仲間入りに対する考え方をまとめる。

(2) 仲間入り表現を記録する

質問紙調査より、特徴的な仲間入り表現のある園を訪問し、子ども達の仲間入り表現の音声記録する。イントネーションなどの分析を行い、特徴や共通性などを分析する。

(3) 中国・韓国の仲間入り行動の調査

今回は、中国・韓国の都市部に限定して、聞き取り調査と仲間入り行動の観察を行う。聞き取り調査のための質問項目を検討し、中国語・韓国語に翻訳する。都市部の就学前施設で一般的と考えられるものを抽出し、訪問して聞き取り調査と仲間入りの行動観察を実施する。聞き取りは、仲間入り行動を観察したクラスの担任保育者を対象とする。収集したデータを、日本のデータと比較できるかたちで、まとめる。

4. 研究成果

(1) 仲間入り表現

仲間入り表現で一番多かったのは「入れて」で104園が使用していた（Table 1）。

Table 1 仲間入り表現

「入れて」全国的にこの表現は使用されていた（104園）
「よせて」「よして」「よらして」（19園）
和歌山県・兵庫県・徳島県・島根県・京都府
「まぜて」（16園）山形県・宮城県・石川県・北海道・沖縄県
「はめて」（1園）岩手県
「かたして」（8園）鹿児島県・長崎県
「かてて」（2園）青森県・大分県

「入れて」は全国的に使用されていた。「入れて」と他の表現を使用している園は38園であった。他の表現のみを使用している園が

8園あり、その中で、「よせて」のみを使用している園が3園、「まぜて」のみを使用している園は5園であった。

(2) リズミカルな表現

仲間入りの表現にリズミカルな言い方をしているのか、その表現への返答としての「いいよ」「だめよ」にもリズミカルな言い方をしているかどうかを尋ねた結果を Table 2 に示す。仲間入りの表現については、リズミカルな表現が「ある」「時々ある」をあわせると、80%以上になることがわかる。仲間入りの表現による違いは見られず、どの表現においても、リズミカルな表現があるとする場合と、ないとする場合があった。また、返答についてもリズミカルな表現が「ある」「時々ある」をあわせると、70%以上になった。さらに、仲間入りの表現がリズミカルな場合、その返答もリズミカルな表現が多いかどうかを検討しところ、リズミカルな仲間入り表現をする場合、その80%以上は、リズミカルな表現で返答されていることがわかった。

Table 2 仲間入りのリズミカルな表現

	する	時々する	ない	無回答	合計
リズミカルな言い方	59 51.8%	35 30.7%	18 15.8%	2 1.8%	114 100%
応答時にリズミカルな言い方	50 43.9%	35 30.7%	25 21.9%	4 3.5%	114 100%

(3) 仲間入り表現が見られる年齢

保育開始年齢が異なるため、回答を幼稚園と保育園に分けて Table 4 に示した。

Table 4. 仲間入り表現の年齢

年齢	幼稚園	保育園	合計
1歳	—	2(3.1%)	2(1.8%)
2歳	1(2.0%)	10(15.4%)	11(9.6%)
2～3歳	2(4.1%)	3(4.6%)	5(4.4%)
3歳	11(22.4%)	26(40.0%)	37(32.5%)
3～4歳	2(4.1%)	9(13.8%)	11(9.6%)
4歳	15(30.6%)	8(12.3%)	23(20.2%)
4～5歳	2(4.1%)	1(1.5%)	3(2.6%)
5歳	4(8.2%)	1(1.5%)	5(4.4%)
無回答	12(24.5%)	5(7.7%)	17(14.9%)
合計	49(100%)	65(100%)	114(100%)

「2～3歳」のように二つの年齢に渡って示している項目は、保育者の回答の中で「2, 3歳」「2歳半くらい」などとの記載をあてた。また、「幼稚園」のなかで「2歳」「2～3歳」の項目に記入した3園は、2園が「認定子ども園」であった。

数の多かった「3歳」と「4歳」について着目してみる。「3歳」で仲間入り表現が見られる割合は、「幼稚園」で22.4%、「保育園」で40.0%であった。「4歳」で仲間入り表現が見られる割合は、「幼稚園」で30.6%、

「保育園」で12.3%であった。保育園では3歳に幼稚園では4歳にピークを迎えると言える。また、「幼稚園」の3歳児で見られるとした11園中8園は、3歳児保育を実施しており、4歳とした15園中9園は4歳児からの2年保育であった。「集団の経験の差が大きいのではないかと記入した園もあったように、集団保育の経験がいつから始まるのかとすることが、仲間入り表現が見られる年齢と関連しているのかもしれない。

(4) 保育者と仲間入り表現

ここでは、「入れて」などの仲間入りの表現を保育者が教えるかどうかについて、幼稚園と保育園別の回答を Table 5 に示した。保育園では、「ある」とする場合が80%以上だが、幼稚園では50%に満たなかった。幼稚園では、保育園ほど積極的に仲間入りの表現を教えていないようだ。

Table 5. 仲間入り表現の保育者の導入の有無

	ある	時々ある	ない	無回答	合計
幼稚園	24(49.0%)	15(30.6%)	7(14.3%)	3(6.1%)	49(100)
保育園	53(81.5%)	10(15.4%)	2(3.1%)	—	65(100)

仲間入りの表現を教える年齢について、幼稚園と保育園別の回答を Table 6 に示した。

Table 6. 仲間入り表現を教える年齢

年齢	幼稚園	保育園	合計
1歳	—	12(18.5%)	12(10.5%)
1～2歳	—	1(1.5%)	1(0.9%)
2歳	2(4.1%)	28(43.1%)	30(26.3%)
2～3歳	—	4(6.2%)	4(3.5%)
3歳	17(34.7%)	12(18.5%)	29(25.4%)
3～4歳	1(2.0%)	2(3.1%)	3(2.6%)
4歳	9(18.4%)	1(1.5%)	10(8.8%)
5歳	3(6.1%)	—	3(2.6%)
無回答	17(34.7%)	5(7.7%)	22(19.3%)
合計	49	65	114

数の多い2歳と3歳に着目してみる。2歳では、保育園の43.1%が仲間入り表現を教えるという年齢にしている。幼稚園でも2園見られたが、1園は、2歳で仲間入り表現が見られるとした幼稚園であった。3歳では幼稚園で34.7%であった。保育園では2歳に、幼稚園では3歳に、教える年齢のピークがある。仲間入り表現が見られる年齢は、保育園では3歳に、幼稚園では4歳が一番多くなっていたが、そうした表現が見られるより1年早く保育者が子ども達に教えている年齢のピークが来ていることがわかる。

(5) 仲間入り表現と子どもの反応

「入れて」などの仲間入り表現を使った方が仲間入りしやすいかどうかを尋ねた結果年少時、年長時のどちらも仲間に入りやすい

と言う回答が、「幼稚園」でも「保育園」でも最も多く、「幼稚園」では 44.9%、保育園では 69.2%であった。仲間入りのしやすさに関係ないとする割合は、「幼稚園」では 12.2%、「保育園」では、6.2%であった。仲間入りの際には、仲間入り表現を使用した方が仲間に入りやすいと保育者は受け止めている割合は高いが、「幼稚園」では「関係ない」とする意見も多かった。

(6) 仲間入りの表現の音声分析

特徴的な表現を持つ言い方をする7園を選び、訪問して仲間入り表現を録音した。抽出した7園のある都道府県名と仲間入り表現は、京都府「よらして」石川県「まぜて」岩手県「はめて」青森県「かてて」鹿児島県「かたして」島根県「よせて」徳島県「よして」である。アンケート調査は実施しなかったが、埼玉県園で「入れて」を収録した。

収録したどの園でも、「入れて」の表現も使用していた。地域によっては、ほとんど独特の表現は使用されなくなっているという園もあった。子ども達に「入れて」以外にどんな言い方があるか尋ねると、地域独特の表現を知っていて声に出して表現してくれた。耳で聞き取る限り、リズムカルな表現であった。一つの園あたり何人かの子どもに依頼して、音声を収録した。その中から聞き取りやすい音声を抽出して、絶対音感を持つ音楽を専門とする大学教員に音譜にしてもらった。その結果が、Figure1-3に示すとおりである。紙面の都合上、「入れて」「まぜて」「かてて」のみの分析を示す。最初の音を基準として基準線を引いた。最初の音の長さを四分音符で表した。岡林(2003)が指摘しているように、日本の文化に慣習的な長2度の2音旋律からなっていた。また、イントネーションは、最後の音が前の音より高くなっている点が共通していた。多くの場合は中央の音が最初の音より低くなる傾向があるという点に共通性が見られている。

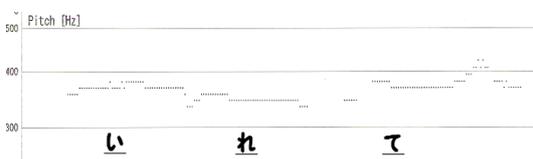


Fig.1 埼玉「いれて」

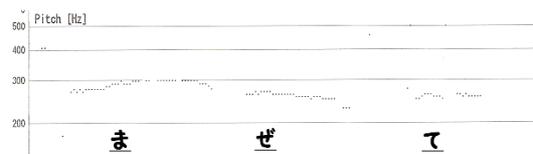


Fig.2 石川「まぜて」

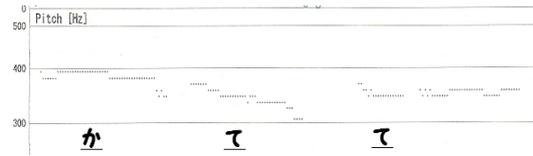


Fig.3 青森「かてて」

(6) 中国と韓国の仲間入り：日本との比較から

①インタビュー調査から：どちらの国も仲間入りの際のきまりきった表現がなかった。

仲間に入り拒絶された場合の対応について、各々の保育者にインタビューを実施した。日本で収録した仲間入り拒絶されている場面も見せて、意見を求めた。その結果、日本の保育者が、子どもを無理には入れさせずに新たに同じ遊びを一緒にやってあげる、という姿勢であった。中国と韓国の保育者は無理には入れさせないという点では同様であったが、具体的にどうすればよいかという方法を教えるという働きかけも行っていた。

日中韓の保育者とも、双方の子どもの気持ちを尊重し、入れない子どもの不満の気持ちを解決できるようにすることは同じである。ただ、日本の保育者は、子どもが遊びに入りたいのはその子がその遊びに魅力を感じ、同じ遊びをすることで満足を得ようとするからだと思っている様子がインタビューからうかがえた。それに対して中国や韓国の保育者は、子どもが遊びに入りたいのは、遊び仲間を求めているのであって、別の遊び相手を見つけることで子どもの不満は解消できると考えている。

日本の保育者は、子どもと一緒に仲間入りの際の交渉をして、拒絶された場合はその理由を尋ねるような働きかけをして、どのように交渉をすればよいかのモデルを示している。また、拒絶された子どもの遊び仲間となり、一緒に新たな遊びを展開して仲間に入れなかった気持ちに共感しつつ新たな方向背を示す、という対応が非常に多い。一方中国や韓国の保育者は、年少組には手助けをし

Table 7 仲間入り拒絶時の対応

カテゴリー名	カテゴリーの内容	日本	中国	韓国
一緒に入る・遊ぶ	先生も一緒に入る、あるいは他の遊びをする	8人	2人	2人
適切な方法	どうしたらよいか方法を示す	1人	7人	3人

と一緒に遊べるようにし、年中・年長組には助言はするが、手助けはせず自分で入っていくように導く、といった対応が多い。中国や

韓国の保育者は、あくまでも「教える」という立場に立っているように思われる。各々の国の保育者は、仲間入りについて次のように語っている。

(日本の保育者B)

『自分から友達遊びには入れない子どもは、その遊びのそばで、その遊びの様子を見ていると思うのです。その遊びの様子を見て、私が「あっ、入りたいたろうな」って思ったときには、その見ている子ども、なかなか入れない子どもに「じゃあ、一緒に入って言ってみる？」というふうにして、仲間に入るきっかけを作っています。』

(中国の保育者B4)

『4・5歳児なら手助けはしないけれど、3歳児なら方法を考えて助けてあげます。やり方を教えて、本人が入りやすい環境を整えてあげます。』

(韓国の保育者)

『決まり文句はないんですけど、状況によって、自然に、自然に親しくなって遊んだりとかしています。だいたい状況によって若干言葉が違うだけで、決まり文句はないんです。学期の初めは、やっぱり親しくなくて、みんな慣れてないから、その時は、多少回りを気にして「私もしていい？」とかそういう言葉を表現したりするんですけど、決まり文句はないです。』

『積極的な子どもにお願いして、「ちょっとこの子と遊んだら？」みたいな、「仲間に入れてあげて」と言って、そこから入れて遊ばせると、積極的な子どものそういう性格を学んだりすることができるので、先生が直接お願いします。』

②アンケート調査から：日本・中国・韓国の保育者に保育観についてアンケート調査を実施した。日本の保育者は120名、中国の保育者は99名、韓国の保育者は、22名から回答が得られた。調査結果の中から、「幼稚園で育みたいもの」についての回答を示す。6個の項目から2つを選択してもらった。その結果、日本では、「人と関わる力」「いろいろな遊びを経験させる」が上位2項目であった。韓国は、「人と関わる力」と「基本的な生活習慣」、中国は「基本的な生活習慣」と「いろいろな遊びを経験させる」が上位2項目であった。日本の場合、9割以上の保育者が選択しているが、中国も韓国もそのように選択率のが高い項目は見られなかった。中国と韓国が上位に挙げていた「基本的な生活習慣」は日本では2割強の選択率であり、それほど重視されていない。「人と関わる力」重視の日本であるからこそ、仲間入りを含めたいざごさなど、子ども観のコミュニケーションに丁寧に関わっていると考えられる。

Table 7 幼稚園で育みたいもの

単位：人 (%)

項目	国別	選択あり
1 知力	日本	1(0.8%)
	韓国	1(4.5%)
	中国	35(35.4%)
2 人と関わる力	日本	112(93.3%)
	韓国	15(68.2%)
	中国	32(32.3%)
3 友達を作ること	日本	6(5.0%)
	韓国	2(9.1%)
	中国	27(27.3%)
4 いろいろな遊びを経験させること	日本	85(70.8%)
	韓国	9(40.9%)
	中国	46(46.5%)
5 基本的な生活習慣を身に付けさせること	日本	27(22.5%)
	韓国	12(54.5%)
	中国	55(55.6%)
6 ルールを守ること	日本	9(7.5%)
	韓国	1(4.5%)
	中国	3(3.0%)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

①「いざごさを通してみた中国の保育者の保育観—日本の保育者の保育観との比較から」
劉海紅 倉持清美 乳幼児教育学会
2008 No17 63-72

〔学会発表〕(計2件)

①日本保育学会第60回大会 2007年度 仲間入りのリテュアルな表現—各地域調査より 倉持清美・柴坂寿子

②日本発達心理学会第19回大会 2008 日中の保育者の保育観 劉海紅 倉持清美

6. 研究組織

(1) 研究代表者

倉持清美(KURAMOCHI KIYOMI)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：30313282

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

